

於ても、歴史愛好者のみならず、廣く一般人士の是非座右に置くべき良書として推薦したい。

最後に本書に續いて、著者によつて中支那更に南支那の競争地理が相ついで工作され、事變下殊に意義ある三部作として完成さる、日を期待して並雜なる紹介を終る。(四六判一四四頁、圖版四、別刷地圖一、昭和十四年十二月、富山房發行、定價壹圓拾錢〔岡本午一〕)

東洋に於ける素朴主義の民族と

文明主義の社會

支那歴史地理叢書第四

宮崎市 定著

私が曾て讀んだ東洋史の概説書の中で、その著者が獨自の定見を以て終始一貫せる方針により一冊を書き成したと思はれるのはたつた二つである。一つは私の父の「支那論」であり、一つは岡崎文夫博士の「支那史概説」である。それに概説書ではないが矢野仁一博士の「近代支那外交史」がある。勿論どんな書にしても多かれ少かれ著者の考への表はれないものがある筈はないが上記諸書は中でも特にはつきりしてゐるといふ意味なのだ。宮崎先生の此書は數少いこの種の著書の一つに加へられると思ふ。その旗色鮮明なる點では寧ろ上の諸書よりも明確であると思はれる。唯從來の名家の書にいくらか劣ると思はれるのは著者の方針の適用に急なる餘り種々の點に於て多少の杜撰さが生じてゐる感みがある

ことであらう。

然らば本書の方針とは如何なるものであるか。それは書を成すに當つて先づ重要な根本概念が定められてゐる事これである。標題の「素朴主義」と「文明主義」が即ちこの根本概念だ。この二つの傾向の對立の状態に於て東洋史を理解し、この對立の状態の動き方の中に「進歩」といふ更にも一つ次元の高い概念を導き出さうといふのが本書の方針である様に思はれる。この事は本書の體の分け方にそのまゝ表はれてゐる。第一篇「古代に於ける文明主義社會の成立」に於て先づ黄河中流の鹽の産地を中心とする文明社會の成立を説いて居る。そしてこの文明社會なる概念を作るのに常に素朴民族なる對立的概念を以て裏付けしてゐるのが注目し得る。歴史上夷狄がはつきり勢力を持ち始める時期は普通漢の時の匈奴といふ事になつてゐるが、本書に於ては殷周の革命からを既にこの二つの社會の相尅状態として觀てゐる。(尙古代文明社會發祥の主なる原因を通説の如く農業とせず、鹽の産出によつて説明したのも本書の特色である。)第二篇「中世に於ける素朴民族の活動」に於ては文明社會に刺戟されて自覺した周圍の未開諸民族が遂に中原の地に入り込んで漢人の國家社會を脅した事を詳述して素朴主義の勝利を説き、同時に素朴民族が文明社會に同化されてはその素朴性を失つて國を亡ぼすといふ、いはゞ素朴民族の弱味をも併せ述べて居る。第三篇は最も興味深い篇である。即ち文明社會の人間達も近世に至つて遂に素朴主義の長所を認め、朱子や王安石の如く文明社會に素朴主義を取り入れんとするものさへ

も現はれた。一方素朴民族の方でも文明主義に溺れることの危険を感じ始めて之を戒しめ國粹主義を唱へる者が出た。つまり素朴主義の美點と文明主義の弊害が兩方の社會に於て自覺されたといふのである。「近世に於ける素朴主義社會の理想」といふのがその篇名である。最後に西洋に於ては科學なるもの、存在の爲に文明主義社會も比較的よくその素朴性を失はずに居ること（この事は私には今一つはつきりと分らない。一段の吟味を要する點であると思ふ。私の考へでは西洋と雖も例外であるべき筈がなく、科學こそは近世の素朴主義の武器であらうと思ふ）を擧げて今日の我國の行くべき道を示して居る。

初にいつた様に此の書は著者の方針が非常に明確に表はされて居る。如上の内容の如きも一讀すれば何等苦勞せず抽出され得るもので、不鮮明な著者の意圖を忖度し乍ら讀む必要は少しもない。これは畢竟著者の頭の中でその方針が明確に計劃されてゐた事を示すものだと思ふ。けれど慾をいへば次の様な事が多少の缺點である。一つは素朴性といひ文明主義といふその概念の内容が今一つはつきりしてゐない。著者は歴史を述べることに於てこれを自ら讀者に了解させやうといふのであらうが、その續りで讀んで見ても、も一つはつきりした定義が引き出せない。概念が元々はつきりしてゐないのでその概念が、移り行く時代の敘述と共に少しづつ變つて行つてもそれは目立たない。併しそれでは讀者としては多少戸惑ひせざるを得ない。本書を讀んだ印象では古代と中世の歴史に基いて得た二つの概念を近世にあてはめ様とした

のだといふ風に感ずる。そしてその際始めに決定した概念をなるべく多く動かさない様に努めた如くに感ずる。

所が史學研究者の立場よりすれば、初に決めた概念を新しく智識によつて更改して行き度いことこそこの目指す所であつてそこにこそ眞の進歩があるといへる。本書の近世殊に後半の部分に於てはかゝる努力が餘り見受けられないのが残念だ。第三篇に至つて敘述がいくらか生彩を失ひ、史實の解釋も村撰になつて來た如き感を興へるのはかういふ理由によるのではなからうか。それからも一つの不満は多くの概説書と同じく本書に於ても著者の人類に附したる價值は民族の發展、國家や社會の繁榮へこれも主として政治經濟上の繁榮等にあるが如く見受けられる。それならば何故この様なものが價值があるかといふ根據づけが理論的にしろ記述的にしろあつて欲しいと思ふ。自明の理であるといへばそれまでだが、世の中にはそういふ價值を最高のものとして疑ふ者もないとは限らないし、時代によつては一般社會全體がこれを疑ふ様な風潮が或は起り得たかも知れない。

ともあれ本書は支那歴史地理叢書中の白眉であらう事はいはすもがな、東洋史學界全般を通じても近來の名著たるを失はないと思ふ。本書を讀んで東洋史學界に清涼の氣を感じる者は單に私人ではなからう。今後基礎的な史料や史實の研究の間に時たまこの種の本が出て一般人たちのみならず學界に對しても清涼の氣を注入されることを希望して止まないものである。（四六判一九七頁、圖版四、昭和十五年四月、富山房發行、定價壹圓貳拾錢）

〔内藤戊申〕

古代の蒙古

支那歴史地理叢書第五

内田 吟 風著

古代の蒙古といへば、だれしも元朝蒙古の勃興期をおもふであらう。しかし、こゝにいふ古代蒙古は、蒙古の地に歴史の光がさしそめてから、匈奴の興起、崩壞までをとりあつてゐる。これには蒙古の歴史を單なる民族の交替とせず、現代蒙古民族に至るまでの一貫した傳統と統一ある歴史をみる著者の根本的態度がみとめられる。これは蒙古史研究にとつてひとつの前進である。

ばらばらの民族交替史から一貫した蒙古史の確立、こゝには沙漠と草原とに生をえた游牧民文化の必然性、その發展の自律性に對するふかい同情がある。これはいままで、從屬的にしかみななかつた蒙古の民族興亡を支那史料による塞外史的觀察を破棄したものである。つまり蒙古史研究における二重の前進、すくなくともその試みであるといへよう。

著者は支那最古の文獻である殷墟の甲骨文について、游牧民文化の發祥をかんがへ、網石器とか土器の考古學的遺物について、その活動のありさまをのべ、『穆天子傳』を穆王の蒙古横斷記とみて、前十世紀頃の蒙古の状態をとき、ついで一轉してたゞちに匈奴の勃興期、さらにその全盛期、崩壞期におよんでゐる。この匈奴時代は古代蒙古のもつとも華々しい時代であるとともに、また

本書の主要なる部分をなすものであつて、その政治史をととき、その文化交流をととき、その言語風俗をとくうちに著者多年の蘊蓄がうかゞはれる。

その間、著者は古文獻のみならず、支那古銅器、綏遠青銅器、ノインウラ遺物、トルキスタン出土品等近時發見された諸種の遺物遺跡等をとりいれ、つとめて豊富なる内容をあたへることに苦心してゐられるのは、特に本書のためにこゝろみられた新しい意圖であるらしい。とにかく綜合的な古代蒙古史として、まつたく新しい觀點にたつてゐる上に、論斷また獨創的であつて、單なる啓蒙的述作ではない。わたくしとしては、一二考古學的遺物の解釋において異論を有するものがあるけれども、それは決して本書の價値を左右するものではないとおもふ。(四六版、本文一五九、附録二五頁、圖版四、地圖一、昭和十五年四月、富山房發行、壺四貳拾錢)(水野清一)

蒙古の祕史

小林高四郎譯註

翻譯といふものは至難な業である。局部的詳細に拘ればとかく譯文が生硬に陥る。譯文を整へてもなほ且原文の持つニュアンスを如何に漂はすかの問題が残る。畢竟翻譯にはすべてを復原することは望み得べくもない期待であらう。其は唯原語を通じてのみ許さるゝ特權でなければならぬ。

従つて翻譯を志す者には、何よりも先づその限定を持つことが